

国語科授業の改善（令和元年 8 月 10 日）

令和 2 年より新しい学習指導要領の実施となる。アクティブラーニングから始まり「主体的対話的で深い学び」が実現できる方向に定まった。国語科授業改善について、あらためて次のことを考えている。

提案 1

＜国語科を人間力を育てる教科としてとらえ国語科で「生きる力」を育てるとは、何かということ授業の中で考え続ける＞

国語科でなくても、学校全体で考えることである。時には「子ども理解」「学級経営」の問題として片付けてもよい内容である。しかし、国語科は、言葉についての資質・能力を育てることが目的である。「言葉で考える」ことは授業の基本である。国語科授業が評価されるのは、まず、学級の国語力である。「指示が聞ける」「友達に不快な言葉を使わない」などを本気で指導をしているかという問い続けることである。

国語科の授業は「おもしろくない」というのが一般的な声である。「おもしろい」と思える以前に、国語は大事であるという意識を子どもに育てることに力を注いでいるか問い直すことである。教師と一部の子のやりとりが中心となることがあっても、やりとりの中で、国語の力を育てという目標を持って授業にをっているとい実感を持って授業を進めることが「主体的対話的で深い学び」の実現につながる。

提案 2

＜国語学習力を育てる授業にするために授業の仕組みを考える＞

国語学習力は興味・関心・意欲の側面と継続・積み上げが基盤にある。授業は、国語を学ぶ喜びがないと学習力の基盤は育たない。そのためには、授業の仕組みを変える必要がある。

子どもが学習を続ける段取りは教師の仕事である。学習力を育てる視点で授業を創造することが大事である。たとえば、次のような学習過程を考えてみた。

- ①教材の全体を理解させるための読みを繰り返す。
- ②「学習の手引」を自分の力で進める。
- ③学習集団として学習を進めると成果があると思える場面を学び合う。
- ④学習成果の確認をする。

ここでいう①は、学習の見通しを持つための耕しの時間である。音読は大事である。が家庭学習が多かったことから、「学習の手引」が活用できる力を育てるための第一段階と捉えれば、本来の音読指導に道が拓く。

国語はまず、教材と謙虚に向かうことである。文章に叙述されている言葉との出会いを大事にすると、「考えよう・調べよう・確かめよう」という気持ちが生まれる。その気持ちは。「この文から」「この言葉から」になり、「同じ所はどこか。違うところはどこか。私だっただうするか。根拠を明らかにする」を意識した学習になる。学習を進める力は自問自答を繰り返す学習習慣を育てる。

提案3

<話す聞く・読む・書く>を言語活動と捉え学習活動量を意識して授業する>

「今日の授業はよかった」「深い読みができた」という自己評価が多い授業に共通する子どもの国語学習意識がある。学習意識が高い授業は、丁寧で考えることが多い授業である。「考える」ことは、国語の場合は形になってみえにくい。見えるのは「言語活動」である。学習活動量という考えは、国語教室の実態から考えたものである。

ひとりひとりの子に、話す活動をする時間があったか、読む活動の時間があったか、書く活動の時間があったか、というが視点で学習状況を見ていくと「聞く活動」の姿がみえにくいことに気が付く。

学習活動量を増やすことを視点に入れると授業が変わってくる。「今日の学習」をテーマに、何分くらい話ができるか、具体的に子どもに尋ねてみたい。

提案4

<完結型授業から発展型授業へ切り替える>

読解中心の授業から読書指導へ広がる国語科授業を意識を変えると国語授業が変わってくる。細かな文章の読みと共に、本を読む子を育てるようにする。教材に関わる本を読む指導は、読書指導の方向に軸足を置く。発展型授業もこれからの研究課題である。新しい授業を開発するためには、子どもの学びを見抜く力が必要である。

提案5

<語彙を拡げ、考える力を育てる授業を工夫する>

考える力は語彙の量と比例をする。語彙を拡げる学習の工夫をする。日頃の授業では話の機会を生かし、語彙に関心を持たせる。語彙指導は、その気になれば、いつでも、どこでもできる。語彙指導の開発は、これからも大事な指導内容である。

提案6

<個々の子どもの学習力を把握し生かす授業をする>

全体としてできたというのもわかりやすいが、学習力に個人差があることを前提に、習得の状況の目安を持っていることが、全体のレベルを上げる。目標やめあてを定め、習得の姿を形に見えるようにするのである。例えば、「振り返り」を書かせた時の内容は、文字数を多く書いてほしい子もいる。発想を変えてほしい子もいる。個々の子どもの把握は大事であると誰もが思っている。しかし、妙案は浮かばない。それは、継続性が必要だからである。ITの時代。こんなものがあったいいなと思うことから始めるといい結果につながるはずである。「国語力」という息が長い仕事である。「ひとりひとり」を意識することで授業が変わる。これが、授業改善である。

言葉を大事にする教室づくりは丹念に、しかも丁寧にすることから始まる。どの子ども学習目標を自覚する授業を積み上げるには、個々の子どもの学習力を把握し、生かす授業をする。どこまでも「個々の子ども」である。